

---

---

## 神像研究とわたし

---

---

### ・講演要旨

神像の成立とその木取り法の関係につき最近考えていることを述べる。

#### 1 降臨神（垂直降下型）と勧請神（水平移動型）

各地神社の祭神を見ていくと、記紀神話に出てくる神や祖先神を当てているところが多いが、そう比定される歴史的必然性を認めつつも、それをさかのぼる原初の形態が並行して存続しているのではないかと思うことがある。延喜式に記される神の座数、あるいは神社側の主張する祭神に比して、まつられる神像は、形状（男女、老壮）や員数において必ずしも一致しないことが主な理由であり、初期神像の名称やその構成はとりあえず別個に考えるべきでないか。

多様な神を一概にできないのはいうまでもないが、神を神殿内に鎮座させ、そこから神像が成立する過程は大別して二種あるように思う。

降臨神（垂直降下型）の像をまつる古例は、磐座いわくらに降りた神を神殿（または神宮寺）に遷して神像を置いた松尾大社、若狭神宮寺などがそうで、宇佐八幡宮も草創のある時期に神像を置いたものと推定される。神が磐座に降りたままでは崇りをなすので、施設内に鎮めたと考えれば、宿業に苦しむ神を神宮寺に遷し「神の御像」を置いた多度神宮寺も同様である。やや唐突かも知れないが、漂流木、崇りをなす木を彫刻した長谷寺本尊も同類で、僧形神の持物である錫杖を十一面観音が執るという特異な形状は、神仏習合像そのものである。

いっぽう勧請神（水平移動型）は、大安寺・薬師寺（休丘）・手向山・東寺・石清水などの八幡宮のほか、祇園社、北野天満宮などにもうかがえ、既存の寺院内かその隣接地に勧請されているので、磐座から神殿（神宮寺）へという過程が欠けている。当初から神像安置が意図されたようである。

以上の二種は、神を降ろすか遷すかという違いだから、磐座の有無にもつながる。

#### 2 神像の木取り

円空研究の第一人者である小島梯次氏が、割り放った面が重なりあうのもとは同木だったと分かる円空仏数例を紹介している（『愛知県史』文化財3）。それと精神的に通底すると見られる神像がある。

東寺八幡三神像の像底にある大きなウロが、三体同木を示唆すると従来からいわれている。像前方に木芯のある材で、各ウロは相似形のほぼ同大なので、近接した材を上中下に取りついているらしい。御調八幡宮三神像は木芯を中央に籠め、節の有無やその出方で上中下が推定できる。ところが薬師寺三神像は木芯の位置が不規則、年輪の曲線も違い、また何といても仲津姫像が底板貼りなので、同木かどうか不明である。

京都の大宮神社三神像は各像底の年輪のつながりから、同一材の芯を中心に三等分し、背中合わせに彫刻したことが推定できる。山梨・江原浅間神社三神像が背中合わせに三体とも一体化していることと同じ発想である。

## 小 結

同一材から木取りする神像が、産土社である大宮神社像を除きいずれも勧請神なので、勧請するに当たり霊木があらかじめ用意されることがあったものかと想像される。

## ・プロフィール

1945年 岐阜県に生まれる

1970年 名古屋大学文学部美学美術史専攻卒業

京都府立総合資料館、京都国立博物館、文化庁美術学芸課主任文化財調査官を経て  
現在 和歌山県立博物館館長 京都国立博物館名誉館員

専攻 日本仏教美術（彫刻）史

著書 『京都国立博物館仏教彫刻』（京都国立博物館、1984年）

『新編名宝日本の美術 神護寺と室生寺』（小学館、1992年）

『日本美術全集6 平等院と定朝』（編集、講談社、1994年）

『広隆寺上宮王院聖徳太子像 調査報告』（京都大学学術出版会、1997年）

『平安時代彫刻史の研究』（名古屋大学出版会、2000年）

『千本釈迦堂大報恩寺の美術と歴史』（柳原出版、2008年）

『長快作 長谷寺式十一面観音像』（パラミタミュージアム、2008年）

『平安時代後期の彫刻』（至文堂、2004年）

『十世紀の彫刻』（至文堂、2006年）

『松尾大社の神影』（松尾大社、2011年）

他多数